

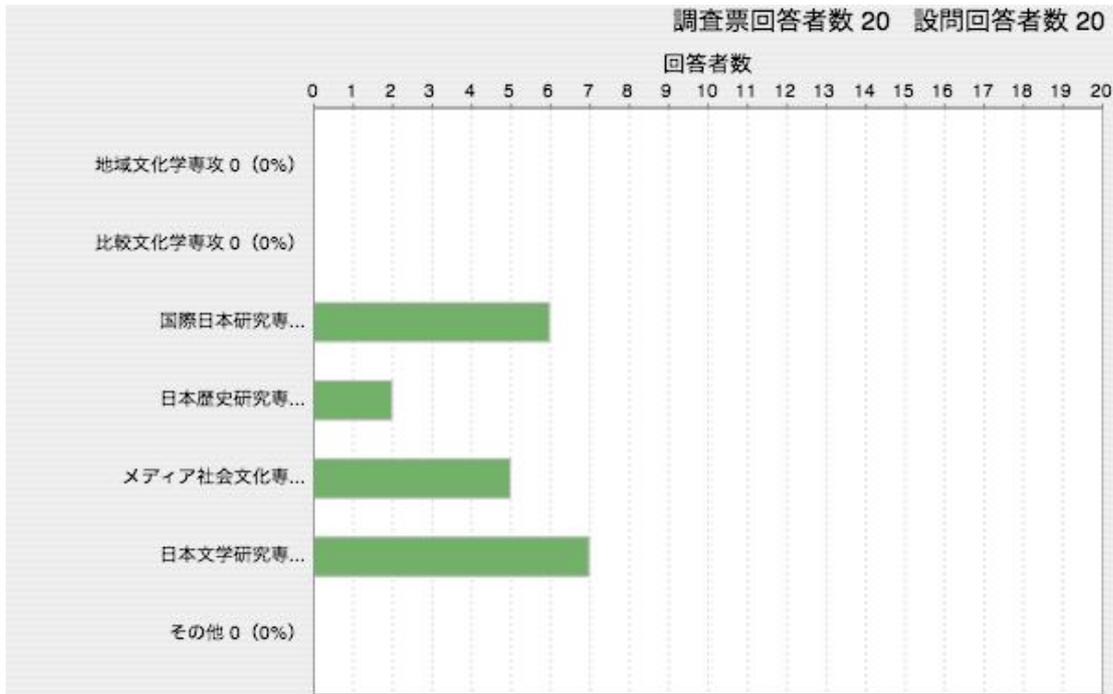
調査票回答者数 20 / 設問回答者数 20

### Q1 ご所属の専攻(修了生は在学中の専攻)

地域文化学専攻	0(0%)
比較文化学専攻	0(0%)
国際日本研究専攻	6(30%)
日本歴史研究専攻	2(10%)
メディア社会文化専攻	5(25%)
日本文学研究専攻	7(35%)
その他	0(0%)

---

無回答 0(0%)



調査票回答者数 20 / 設問回答者数 20

### Q2 現在のお立場

学生(修了生を含む)	14(70%)
研究科教員	2(10%)
専攻長以上の役職経験者	4(20%)

---

無回答 0(0%)



調査票回答者数 20 / 設問回答者数 19

Q3 RT事業(Research Training事業 平成24年度実施)についてお聞きします

1-a 応募の有無

応募した	4(21%)
応募しなかった	15(78%)
<hr/>	
無回答	1(5%)

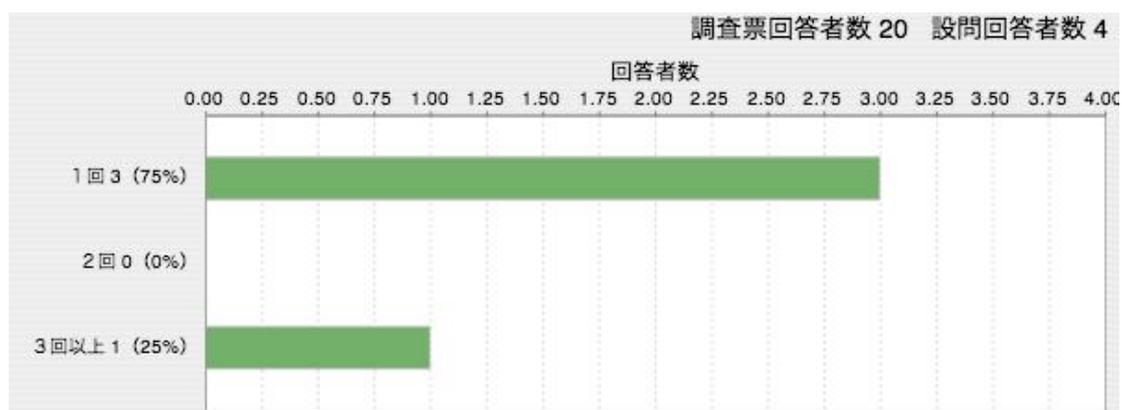


調査票回答者数 20 / 設問回答者数 4

1-b 応募された方にお聞きします

1-b-1 応募回数

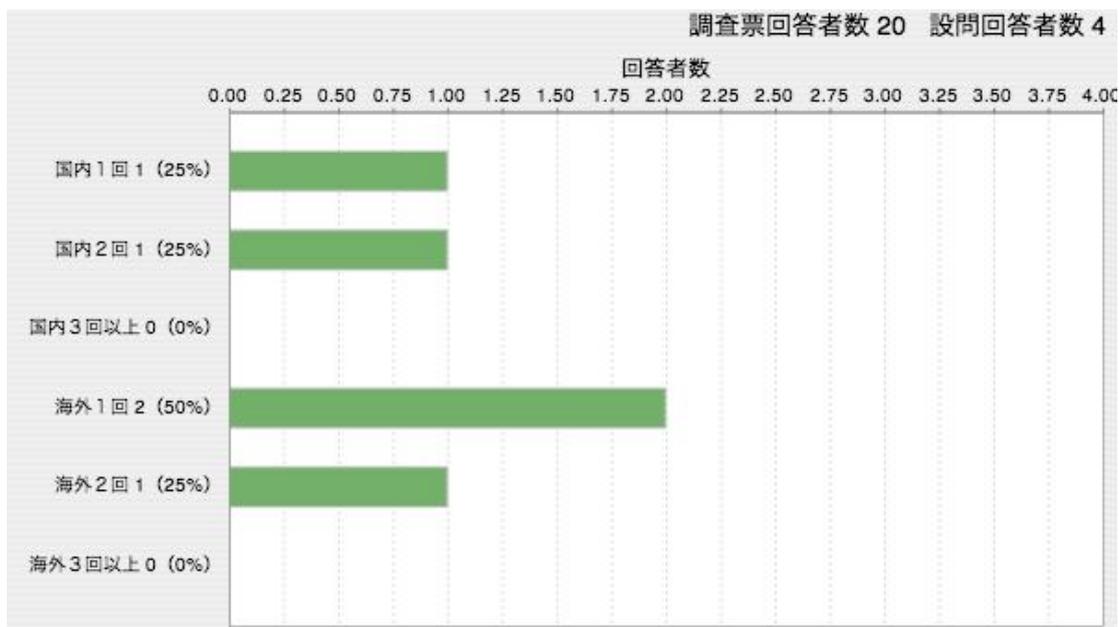
1回	3(75%)
2回	0(0%)
3回以上	1(25%)
<hr/>	
無回答	16(80%)



調査票回答者数 20 / 設問回答者数 4

1-b-2 国内外の別(複数回答可)

国内1回	1 (25%)
国内2回	1 (25%)
国内3回以上	0 (0%)
海外1回	2 (50%)
海外2回	1 (25%)
海外3回以上	0 (0%)
<hr/>	
無回答	16 (80%)



調査票回答者数 20 / 設問回答者数 4

1-b-3 応募の内容(複数回答可)

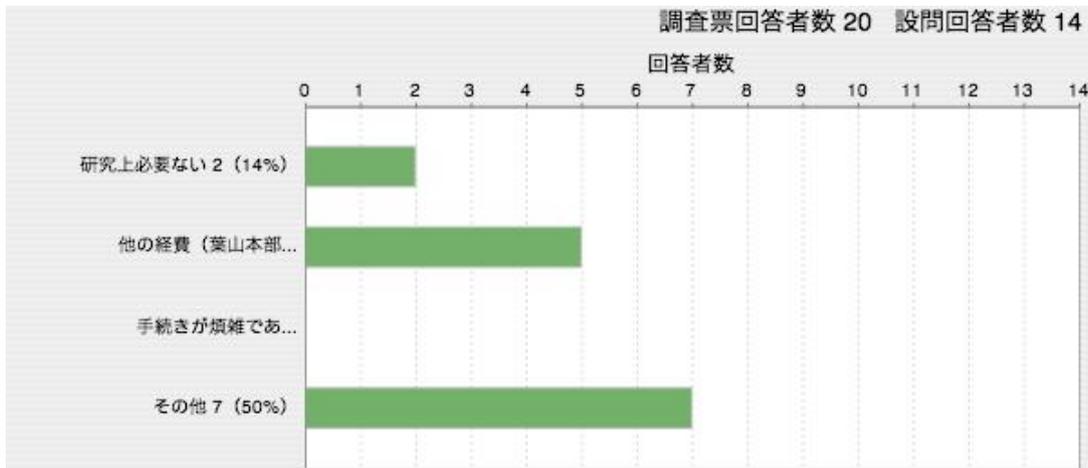
調査活動	2 (50%)
成果発表	2 (50%)
<hr/>	
無回答	16 (80%)



調査票回答者数 20 / 設問回答者数 14

1-c 応募されなかった方にお聞きます  
1-c-1 応募しなかった理由(複数回答可)

研究上必要ない	2(14%)
他の経費(葉山本部・専攻内など)を用いた	5(35%)
手続きが煩雑である	0(0%)
その他	7(50%)
<hr/>	
無回答	6(30%)

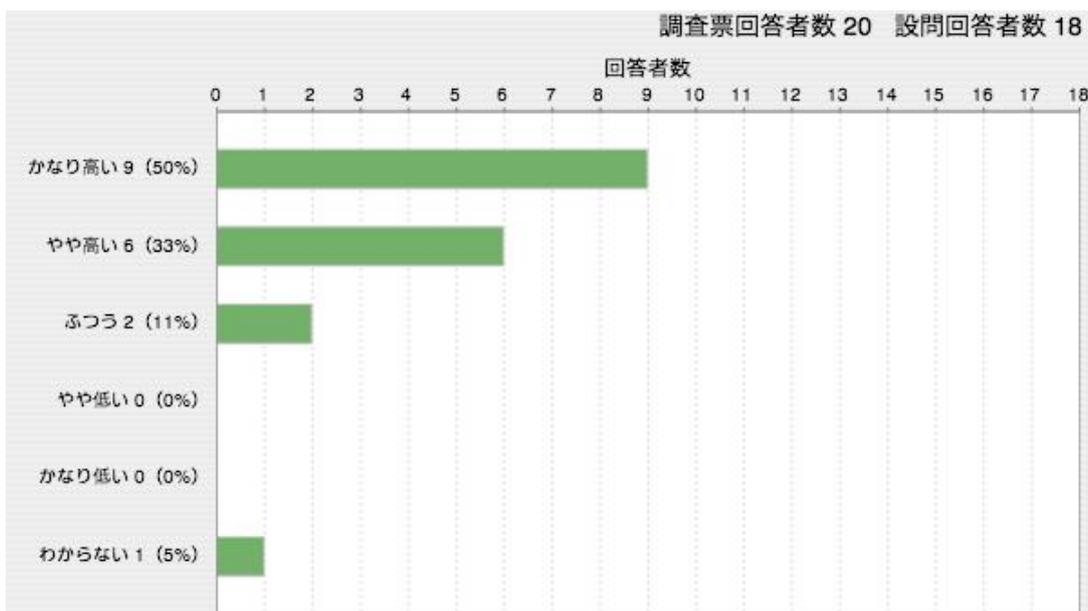


調査票回答者数 20 / 設問回答者数 18

1-d RT事業の必要度

かなり高い	9(50%)
やや高い	6(33%)
ふつう	2(11%)
やや低い	0(0%)
かなり低い	0(0%)
わからない	1(5%)

<hr/>	
無回答	2(10%)



1-e RT事業について、今後への要望など自由にご記入ください

応募締切時期を遅く設定してほしい。
LCCの飛行機に対応できるようになるといいですが。
・今後への要望は特にありません。
・RT事業終了後、文化学術交流フォーラムで成果発表を行い、他専攻の学生・教員と交流するという一連のプログラムは大変充実していると思います。
大変有意義な事業なので、今後ともとぎれることなく続行されるように望みます。若干専攻によって利用度が違うので、利用度の少ない専攻に何かの形でご配慮いただければ幸いです。
調査段階での内容をWeb上で報告する場合、どこまでを公開すべきか悩むことがあります。成果報告の方法・時期などについても検討が重ねられ、RT事業が発展していくことを望みます。
事業そのものは結構なものと思っています。
国際学会で口頭発表、英文の学術雑誌に論文発表のため、文科生の英語指導のような科目を開設すれば、学生にとっては、新たな魅力であろう。

調査票回答者数 20 / 設問回答者数 20

Q4 学術交流フォーラム(平成24年度)につ  
1-a 参加の有無

参加した	8(40%)
参加しなかった	12(60%)
<hr/>	
無回答	0(0%)

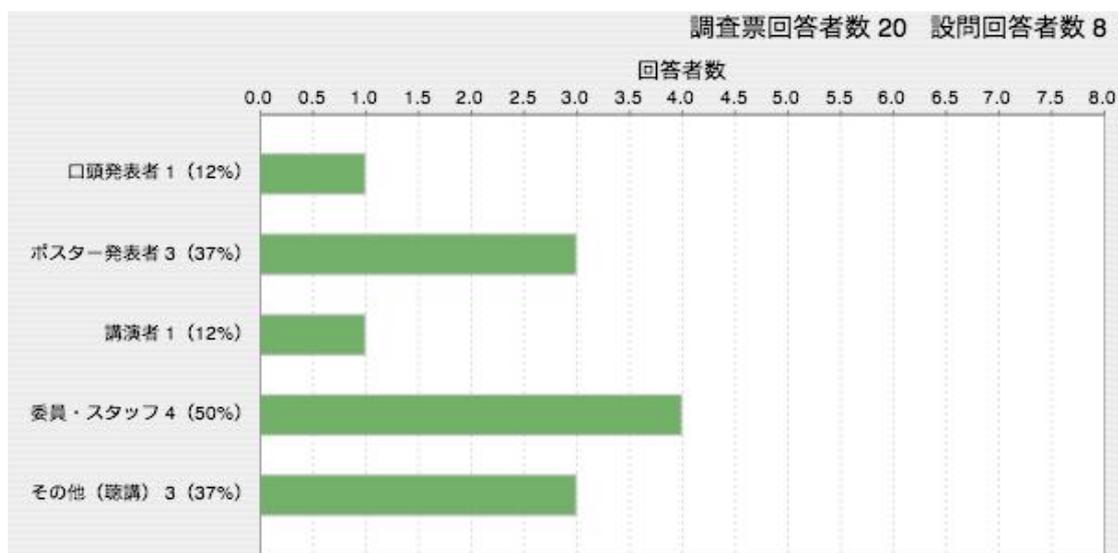


調査票回答者数 20 / 設問回答者数 8

1-b 参加した方にお聞きます  
1-b-1 どのような立場で参加されましたか(複数回答)

口頭発表者	1(12%)
ポスター発表者	3(37%)
講演者	1(12%)
委員・スタッフ	4(50%)
その他(聴講)	3(37%)
<hr/>	

無回答 12(60%)



1-b-2 専攻を超えて、教員・学生が一体となった学術交流を一層進めるため、今年度は学生企画委員が中心となってワークショップを企画いたしました。この試みについてはいかがでしたか。改善点を含めて御意見・御感想をお聞かせ下さい

・今年度の学術交流フォーラムは、特に充実していました(例: 歴博内の見学会、ワークショップなど)。  
・次回は理事の閉会のご挨拶にあったように、発展・拡大(温泉地域での宿泊案も含めて)を期待します。

より多くの方が参加できる単位制が望ましい。

学生が主体的に、特にRT事業での成果を発表するのはよかったですと思います。また、活発なご意見を他専攻の教員・学生からいただいたのは、本当にありがたいことでした。ただ、ちょうど基盤機関でも様々な行事がある時期でもあり、2日間休日がつぶされるのは大変辛いことです。参加する教員も少なく、いつも同じ教員が参加しています。

参加者の方にもよろこんでいただけたので、大変よかったですと思う。

ただ、ワークショップの質をより高めるためにも、ワークショップの報国者と司会が事前により綿密に打ち合わせできればよかったですと思う。

グループワークの中で、ポスター発表者の研究内容をより詳しく聞き、様々な立場からの意見が交換できた点は、有意義だったと思います。改善点としては、2日目のシンポジウム・展示見学・ワークショップの連動性をもたせる点で、更に工夫できると良かったように思います。

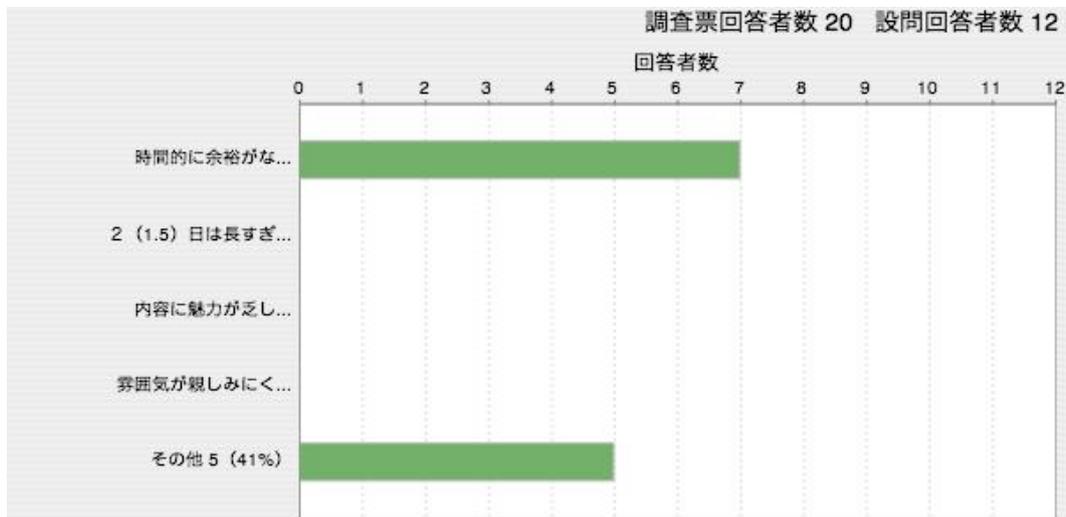
参加率が思ったより低い。

調査票回答者数 20 / 設問回答者数 12

1-c 参加されなかった方にお聞きします(複数回答)

時間的に余裕がない	7(58%)
2(1.5)日は長すぎる	0(0%)
内容に魅力が乏しい	0(0%)
雰囲気親しみにくい	0(0%)
その他	5(41%)

無回答 8(40%)

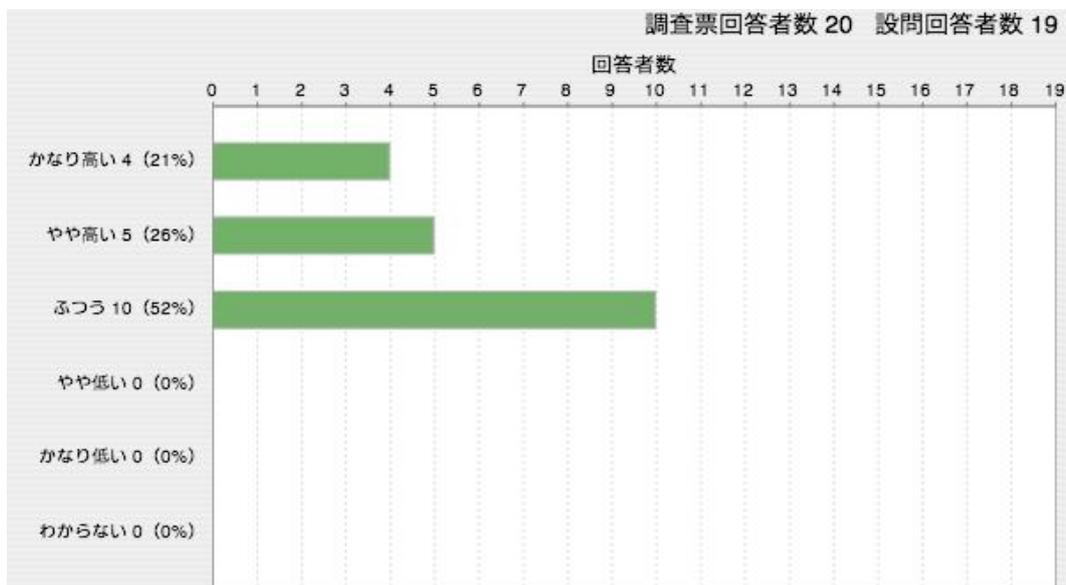


調査票回答者数 20 / 設問回答者数 19

1-d 学術交流フォーラムの必要度

かなり高い	4(21%)
やや高い	5(26%)
ふつう	10(52%)
やや低い	0(0%)
かなり低い	0(0%)
わからない	0(0%)

無回答 1(5%)



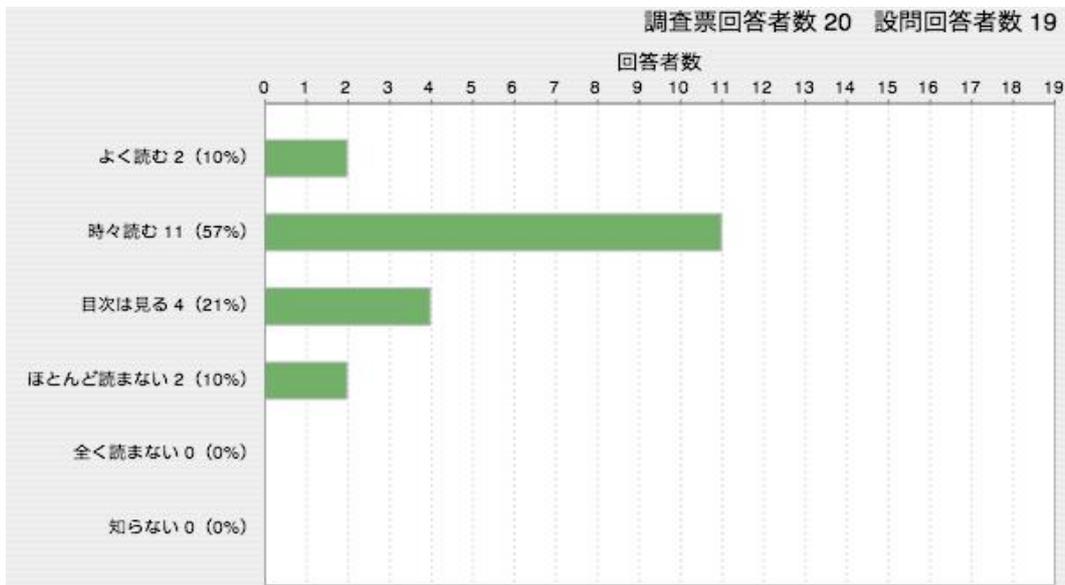
1-e 今後への要望など、本事業について自由にご記入ください

学生の参加者が少ないのが残念です。学術交流フォーラムに一度参加・発表すると、その良さが分かる 学生の研究発表のみにしてほしいです。
学生企画委員を務めた立場からの意見ですが、今年度は開催時期が例年より早く設定されたこともあり、準備を急ぐ中で、専攻内の先生方・院生への説明・周知が十分にできたのだろうかという点が、反省点としてあります。シンポジウムにご登壇頂く先生への依頼についても「依頼時期が遅すぎるのでは？」と、専攻内の他の先生からご指摘を受けたことがありました。企画に対する十分な理解が得られ、より参加しやすいフォーラムにすることが必要だと感じています。
専攻を越えて、という「越境」がポイントのひとつとなっていると思います。総研大全体としての文理融合という考え方はそもそも理系が圧倒的多数であることから、文系である当研究科にとっては「あまり意義のないもの」ですが、研究科全体としての融合や越境という点についても、専攻の組合せによっては意味のあることもあります。ただ、意味のある組合せを作るためには、相手を知るための「お見合い」の場が必要であり、そのためにフォーラムのような場を活用してもらえると、とは思っていましたが、圧倒的に参加教員が少ないため、その意義の出しようもない状況が続いてきたと思います。教員に対しては単位付与という仕掛けも使えませんので、そうしたモチ
電子版報告だけでなく、査読付き『総研大文化科学研究』より、やや査読なしの準学術の報告書を活字版で出版すれば、いかがであろう。せつかく参加された教員や学生は、後程見れば、すこしでも成就感があるであろう。文化科学研究科にとっても積み重ね「過去遺産」であろう。

調査票回答者数 20 / 設問回答者数 19

Q5 『総研大文化科学研究』(年刊)についてお聞きしま  
1-a 活用度・認知度

よく読む	2 (10%)
時々読む	11 (57%)
目次は見る	4 (21%)
ほとんど読まない	2 (10%)
全く読まない	0 (0%)
知らない	0 (0%)
<hr/>	
無回答	1 (5%)



調査票回答者数 20 / 設問回答者数 19

1-b 収録論文などの水準

かなり高い	0 (0%)
比較的高い	8 (42%)
ふつう	8 (42%)
比較的低い	1 (5%)
かなり低い	0 (0%)
わからない	2 (10%)
<hr/>	
無回答	1 (5%)



調査票回答者数 20 / 設問回答者数 20

1-c 投稿・採択

1-c-1 これまで本誌に投稿されたことがありますか

ある	4 (20%)
ない	16 (80%)

---

無回答 0 (0%)



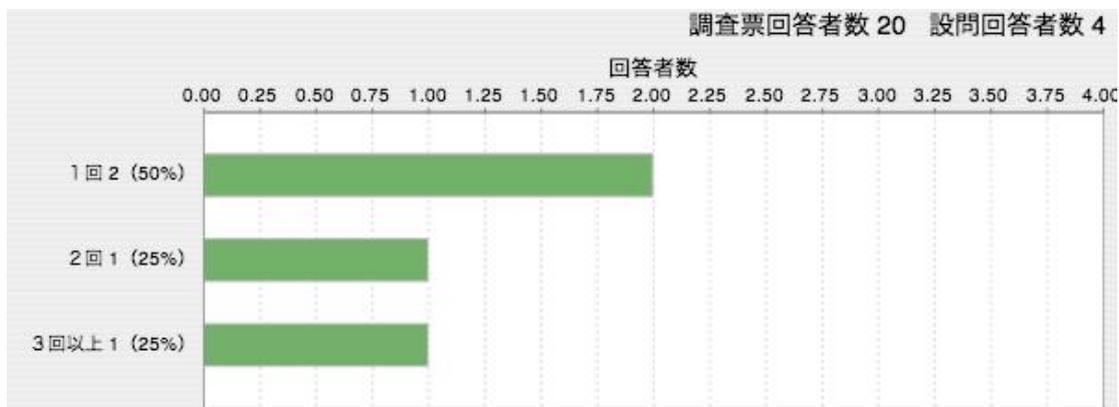
調査票回答者数 20 / 設問回答者数 4

1-c-2 「ある」と答えた方にお聞きます。投稿回数(採択・不採択を問わない。投稿中を含む)

1回	2 (50%)
2回	1 (25%)
3回以上	1 (25%)

---

無回答 16 (80%)

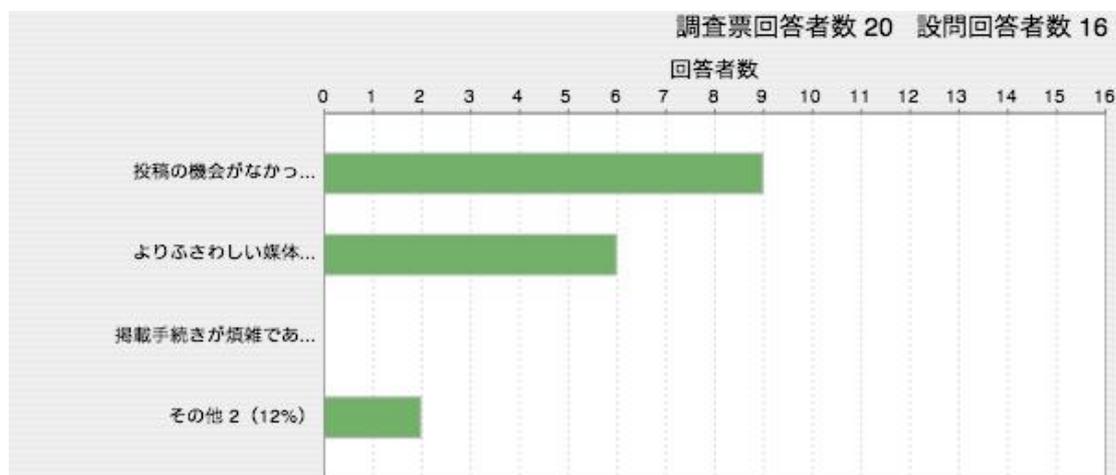


調査票回答者数 20 / 設問回答者

1-c-3 「ない」と答えた方に、その理由をお聞きます(複数回答可)

投稿の機会がなかった	9(56%)
よりふさわしい媒体が他にある	6(37%)
掲載手続きが煩雑である	0(0%)
その他	2(12%)

無回答 4(20%)

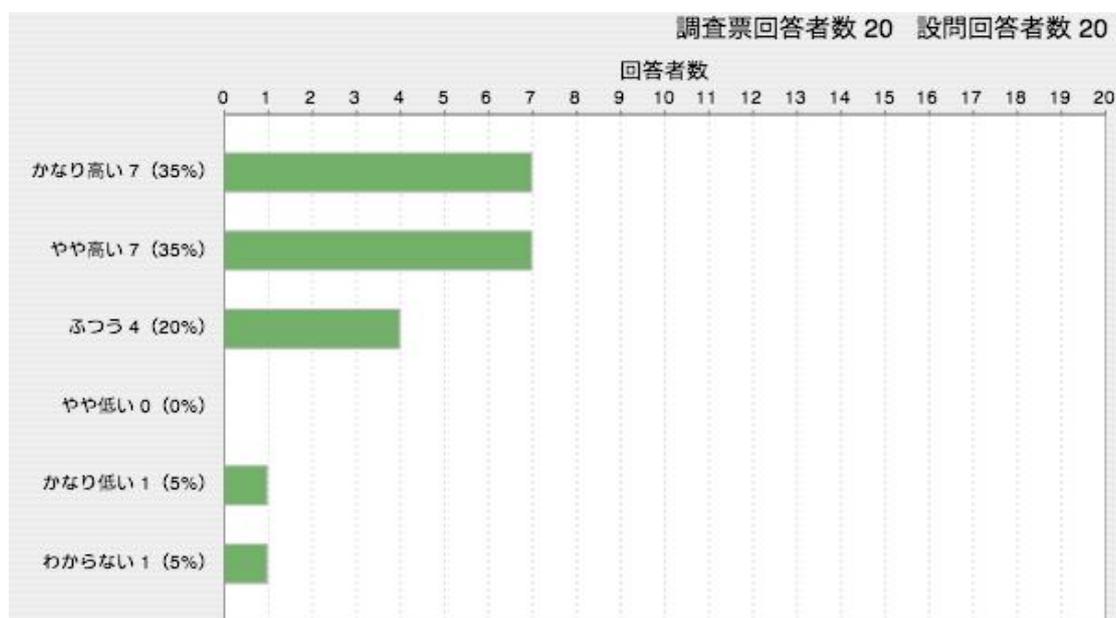


調査票回答者数 20 / 設問回答者数

1-d 『総研大文化科学研究』の必要度

かなり高い	7(35%)
やや高い	7(35%)
ふつう	4(20%)
やや低い	0(0%)
かなり低い	1(5%)
わからない	1(5%)

無回答 0(0%)



1-e 『総研大文化科学研究』について、今後への要望など自由にご記入ください

学術雑誌は大事ですが、フォーマット・スタイルの統一とレベルの高さは望ましい。
投稿締切日を再確認して、投稿を前向きに考えたいと思います。
所属する基盤機関以外の専攻の院生の論考を読む機会が得られることも有意義だと感じています。
当初、発表機会の少ない文系で、その機会を提供するものとして開始されましたが、業績と見る時、学位論文の資格審査においても紀要論文なのか原著論文なのかが専攻によって異なる扱いをされており、さらに就職時の資格審査においては基本的に紀要論文として扱われる可能性が大きいことを考えると、(もちろん査読プロセスのあることは承知していますが)その意義については、「あってもよい」といった程度に考えておくのがいいのではないかと思います。もちろん、積極的な学生は、それ以外のところにも挑戦するので、「これを含めて」業績を沢山出すことになると思いますが。そのベースにある考え方としては、僕は、学位取得者を出すことも大切ですが、学位取得者の就職の場面をも考慮してあげる必要があるのではないかと感じています。いままで様子を維持すれば、数年間経つ総研大のブランドになるかもしれません。だからこそ、いまの姿で綺麗じゃないでしょうか。形式的な容姿は変わらない方がよい。ただ、中身はもっと厳しくすれば良いであろう。ますますレベル高くなるべきと思う。

Q6 事業全般について、今後の必要性・方向性など、ご意見を自由にお書きください。

RT事業は、特に、参加費用がかさむ国際学術会議(国内での開催を含む)で研究実績を積むのに必須の事業と考えます。
総研大の特色を生かす専攻の枠を超えた事業は、今後も必要だと思います。ただ、総研大全体の新生セミナー実行委員、文化科学研究科の学生企画委員を務めた経験から、企画の構成や準備段階の作業の内容や方法を見直すことで負担を軽減できる部分もあるのではないかと感じています。また「大学のアーカイブズ」になると思うのですが、各年度の委員が作成した文書
少なくとも「消極的な意味において」は、何もしないと専攻ごとにばらばらになってしまいやすい総研大の状況を考えると、まさに「継続は力なり」かと思います。ただし、それでは積極的な意義は、と問われると、答えに窮してしまう側面もあります。
学生にとっては極めて重要な事業と思う。今後とも引き続きしていただきたいと思う。
参加率、参加率…